広島訪問同行記

10 月 4 日（金）

朝５時１５分ホテル出発で６時１５分品川発の新幹線に乗ったホワイト（Alexander White）さん、クリスティーン（ Christine Bernie）さん親子には電通ＰＲの東木さんと通訳の高橋さんが同行、名古屋から日赤看護師の関塚さんが、新神戸からはＰＯＷ研究会の田村佳子が乗り込むという形で広島行きが始まりました。10 時 31 分、のぞみ号がホームに到着すると、森重昭さん夫妻のお出迎えを受けました。森さん同様、奥様の佳代子さんも原爆の被害者。あの日、爆風で重い扉が当時４歳だった佳代子さんの背骨に激突、以後その部分は陥没したまま。ホワイトさん達の訪問直前に激痛が走り、同行は無理と電話で聞いていましたが、痛み止めを飲んで会いに来て下さったとの事。そろって広島市立幟町小学校へと急ぎました。学校に到着すると、何人かの先生方が揃ってお出迎えしてくださり、校長室へ。廊下の掲示板には昨年訪問されたベグリーさんがその後この小学校に贈った写真や、オーストラリアの子供達が折ったという鶴４羽が貼ってありました。次々と子供達が学年毎に講堂に行く姿が明け放たれた扉から見えます。時々、ハローと笑顔で声をかけて行く子もちらほら。

いよいよホワイトさんの出番。全学年 500 名程の児童が待つ講堂に入ると大きな拍手でホワイトさんを迎え入れてくれます。舞台のスクリーンには大きな日豪の国旗が映し出され、舞台の縁には日豪の小さな国旗が交互に貼ってあります。校長先生のご挨拶。「昨年に続いて今年もオーストラリアからのお客様をお迎えしました。70 年前の第二次世界大戦で、大変なご苦労をされたと聞いています。ここ広島も原子爆弾で私達の先輩方が沢山亡くなりました。戦争は全ての人が不幸になります。広島に住むものとして戦争や被爆の記憶を語り継ぎ、平和な世の中を築きましょう。」

正面の席に腰かけたホワイトさんは子供達にゆっくりと語りかけました。

「戦争で日本の捕虜となり、私はタイとビルマの間に鉄道を引くという建設作業に駆り出された。故国では消息の途絶えた息子を心配し、母親が軍司令部に問い合わせの手紙を書いた。ここにあるのが、軍から母への返信だ。（黄色くなった手紙のコピーを子供たちに見せる。）この手紙には、『現在のところ、あなたの息子さんの情報は全く分かりません。陸軍大臣と軍事省はご心配なさるお母さまに心を寄せております。国際赤十字などを通じて何らかの情報が得られれば直ちにお知らせする所存です。またお母さまが別のルートで情報を入手されることがありましたら、すぐにこちらまでお知らせください。それはこちらの調査に取りましても多大の価値あるものになりますので。』これは 1942 年 5 月の手紙だった。

1943 年 7 月 17 日に、母は軍から次の手紙を受け取っている。（と、子供たちに次の黄色いコピーを見せる。）『7 月 13 日シンガポールからの短波放送を傍受したものを添付します。』そこにはホワイトさん自身が日本軍に言われタイで書いた電報文が載っていました。『お母さんと家族へ、皆元気ですか。僕も元気です。良い地域で暮らし、とても良い扱いを受けている。手紙を下さい。愛を込めて。』

そしてホワイトさんは最後の一枚のコピーを子供たちに見せました。それはハガキ、俘虜郵便です。タイの収容所から出されたもの。「これはあらかじめ内容が印刷されていて、私はそれに言われた通りに書くだけだった。（そこには、私はタイの収容所にいる。健康状態、良好。労働には支払いを受けている。大変良くしてもらっている、と書いてありました。）

本当は何枚も葉書を書いたはずだ。でもその時の日本兵の虫の居所が悪いと、折角書いたものもただちにゴミ箱行きだった。母は届いたこのたった一枚の葉書を私が帰国するまで大事に取っておいてくれた。今日はここで皆さんに会えて本当にうれしい。招いてくれてありがとう。」

その後、子供たちからは原爆で大勢の児童や先生を失った学校としての普段の活動の紹介がありました。被爆者の話を聞く、折りヅルを折って「原爆の子の像」にお供えする、「原爆犠牲国民学校教師と子供の碑」にも折りヅルを供える、佐々木禎子さん（同校卒業生）の命日である 10 月 25 日にはコスモス集会を開いている、等の紹介がありました。児童による英語での簡単な挨拶の後、ホワイトさんとクリスティーンさんにそれぞれ折り鶴のレイが贈呈され、ホワイトさん達は大喜び。子供達の座る中央に通路が設けてあり、それを通って退場するホワイトさんのお顔はクシャクシャ。左右から延びる子供達の手に出来るだけ多く握手をしようとゆっくりゆっくりと進まれました。

校長室で再度歓談。歴史のある学校なので、特別な取り組みをされていることも分かりました。原爆被害にあった人々から絵などを募集し、それが校区のどのあたりで起きたことか分かるように地域地図も作成されていて、まだ完成はしていないとはおっしゃるものの、かなり迫力がありました。きっと良い記録になるでしょう。

Ｂ２９搭乗員の碑

小学校からバスに乗り、森さんが案内したいとおっしゃった慰霊碑を見学。森さんが私財を投じて、個人の建物の壁面に取り付けたものです。森さんに聞くと、この辺りに昔憲兵隊があり、慰霊碑を置くにふさわしく、しかもこの建物の所有者は森さんの友人なので、すぐに了承してもらえたそうです。銅板は残念ながら少し腐食が始まっていて肉眼で読むことは困難でしたが、写真に撮ると文字が良く読めることが後で分かりました。英文で以下のように書かれています。

＊＊

中国憲兵隊司令部跡地

1945 年 8 月 6 日に投下された原爆は広島市とその市民に未曾有の被害を与えた。ここ憲兵隊に収監されていた米軍航空兵達も犠牲となった。この小さな碑が戦争の残酷さを永遠に知らしめるものとなりますように。

1998. 7. 29.

＊＊

10 月 5 日（土）

原爆資料館を見学。森さんは当初よりご自分で館内を案内したいと希望を出していたのですが、何故か英語の案内ボランティアに説明してもらうことになり、森さんはご不満顔。 英語のボランティアの案内により、館内見学が始まりました。時折、ホワイトさんは質問しながらそれぞれの展示を丹念に見て行きました。最初は、原爆で自分達は解放された、と話されましたが、見終わる頃には、原爆はいけない、２度までも使用するなんてとんでもないことだ、と言われるまでになりました。一方、佐々木禎子さんの折った小さな鶴にはクリスティーンさんが特に興味を示し、その後徐々に見学ペースが遅れて行きました。ホワイトさんと私達が出口に近づいた頃、クリスティーンさんは大幅に遅れて、私達は１階の喫茶コーナーで待ち合わせることにしました。その間、森さんにチャンス到来。ホワイトさんは森さんに米兵慰霊碑を設置したいきさつなどを尋ね、森さんの詳しい説明を聞いて、その熱心な取り組みを讃えました。このねぎらいの言葉で、森さんのこれまでの苦労が報われたようで、笑顔になり、二人で何回も固い握手をかわしていました。

途中でやっと合流したクリスティーンさんは、禎子さんの折りヅルの塔に行きたいと言われ、ひどくなって来た雨をものともせず、折りヅルを供えに行かれました。あいにくの雨とまた週末だった為、この塔まで車で近付けなかったことは残念でしたが、クリスティーンさんは写真を沢山撮ったので、後でホワイトさんに見せると話されました。

（田村佳子）